

ほんに木は可愛か。 木はわしが生きた証しです。

菊池市 指導林家 村上 新也さん



菊池市の中心から車でわずかに十分、竜門ダム建設予定地に程近い場所にその林はありました。直径二十センチメートル強、天を突くばかりにすくと伸びた三十年生の杉の山。地上八、九メートルのところまでもきれいに枝打ちされた杉が整然と並ぶ様は見事に壮観です。

急な山肌を登ること十五分。この山の主、村上新也さん(68)を見つけました。六メートルはあるという高いはしごの上で枝打ちの真最中です。シンと静まり返った山に打ち下されるナタの音だけが響きます。

「枝打ちする時は、良か木になれよ、ちゅうて、わしが魂ば込むとです。ほんに木は可愛いか。朝起きると山が呼びよる気ので行かずにおれん。わしは、一年に三百六十七日山に行くですたい。(笑)」

村上さんは県下に三千人いる指導林家の一人で、戦後裸同然に荒れ果てた山を拓き、炭焼きて生計を立てながら山を甦らせました。当初十五ヘクタールで

点在していた山も、規模拡大と換地によって六団地三十ヘクタールの杉山と五ヘクタールのくぬぎ林になり、林道や橋の整備により一層の作業の効率化が図られています。

山に生きる者には、愛情や体力もさることながら、選木力が大切だそうで、村上さんは、木の個性を見極め、一番いい時期に一番いい形で山から出してやるのが自分の仕事」と語ります。最近では木材価格の低迷など、経営の方も大変だと尋ねると、

「林業というのはとにかく勝負が長い、確かに最近の林業は苦しいのかもしれない。うちも数年前からシイタケば作つとりまします。ただ、何度か言うように林業というのは長い目で見らんといかん。外材の輸入問題にしたって、見方を変えれば、そのお陰で日本の木が切られず、大きく育つともいえる訳で、日本の林業にとってマイナスばかりじゃなかですよ。」との言葉。「足元を見据えることは大事だが目先に捕われちゃいかん。話は大きかばってん、明日の日本の林業はいつも考えとつです。」

まあ、この木が本当に良か木になつとは、息子や孫の代。気の長い話ではあるけど、それだけに楽しみがあつてすね。この木はわしが生きた証しですたい。」と、村上さんは今、枝打ちが済んだばかりの杉を見上げました。

